

飯盛山城遺跡発掘調査概報

— グラウンド造成・FM送信所建設に伴う —

2016年3月

大東市教育委員会

序 文

今回報告しますのは、昭和 63 年と平成元年に実施しました、飯盛山城遺跡における発掘調査の成果です。

飯盛山城遺跡は、中世の山城である飯盛城の城域を想定した、周知の埋蔵文化財包蔵地で、城域は四條畷市側を含めると南北 650 m、東西 400 m と推定されています。

近年は各地で山城の調査・研究が進みつつあり、近隣では、交野市の私部城において継続的な調査が行われ、また、河内長野市の鳥帽子形城は、平成 24 年、大阪府下の城郭では、実に 70 年ぶりに国の史跡に指定され話題となりました。

飯盛城については、ここ数年来の城郭研究者による現地踏査や教育委員会で実施した測量調査等で、従来の山城のイメージとは異なり、堅固な石垣を随所に設けていたことがわかつきました。また、城主であった三好長慶の研究も進み、織田信長に先んじて、京都を抑え畿内を統一した人物としての歴史的評価がされつつあり、居城であった飯盛城についても関心が高まっています。

大東市は平成 27 年、飯盛城を日本の歴史にとって重要な文化財として位置づけ、四條畷市と連携して、国史跡指定に向けての調査・研究をスタートしました。史跡指定を受けるために解決しなければならない課題は多々ありますが、着実に進めてまいりたいと思います。

最後になりましたが、発掘調査に関してご理解と多大なるご協力をいただきました事業者を始め、関係者各位に感謝の意を表しますとともに、遅ればせながら、調査から 30 年近く経過した報告となります。この成果が今後の飯盛城の調査・研究の一助になれば幸いです。

平成 28 年 3 月 31 日

大東市教育委員会

教育長 龜岡 治義

例 言

1. 本書は大東市教育委員会が実施した飯盛山城遺跡の発掘調査概報である。
2. 本書には下記の2件の調査成果を所収している。
 - ①大阪産業大学グランド造成工事に伴う調査（昭和63年9月26日～同年10月3日）
調査名：IMO I
 - ②株式会社FM802送信所建設に伴う調査（平成元年1月9日～同年1月29日）
調査名：IMO II
3. 調査は、大東市教育委員会歴史民俗資料館（調査当時）黒田淳を担当者として実施した。
4. 調査に要した費用は、①は学校法人大阪産業大学、②は株式会社FM802が負担した。記して感謝の意を表す次第である。
5. 調査にあたり、①では東洋建設株式会社、②では住友電気工業株式会社の協力を得た。
6. 調査参加者は下記のとおりである。（順不動・敬称略）
 - ①深沢吉隆、大谷聰、小矢田誠司、中村亘登、三宅秀男、石井裕己、山村俊之、広瀬悟郎、玉本雅己、大山清
 - ②大谷聰、大山清、山村俊之
7. 「飯盛山城遺跡」は、調査当時の周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）の登録名であるが、現在は、名称を変更し「飯盛城跡」となっている。本文中では調査当時の「飯盛山城遺跡」を使用しているが、城そのものを説明する場合は「飯盛城」を使用している。
8. 調査で作成した図面並びに、写真、カラースライドは大東市教育委員会で保管している。広く活用されることを望む。

目 次

第1章 位置と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 IMO Iの調査	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査成果	5
第3節 小結	7
第3章 IMO IIの調査	8
第1節 調査に至る経緯	8
第2節 調査成果	8
第3節 小結	10
第4章 まとめ	10
遺構一覧表・遺物觀察表	11・12
写真	13
報告書抄録	

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境

飯盛山城遺跡の所在する大東市は、大阪府の北東部に位置する。(第1図) 飯盛山城遺跡は、大東市の東部にある飯盛山に築かれた中世の山城である飯盛城の城域と関連遺構を想定して設けられた周知の埋蔵文化財包蔵地(現在の登録名は「飯盛城跡」)であり、その範囲は南北約1300m、東西約200~700mとなっている。

飯盛山城遺跡は、北部分の飯盛城が所在する飯盛山が大東市大字北条、南部分が大東市大字龍間に属している。

飯盛山は、河内平野の東部を南北に走る生駒山地の北部を構成している山塊で、標高は約314mを測り、北部が四條畷市、南部が大東市にそれぞれ属している。(第2図)

飯盛山の地形を概観すると、痩せた後線が南北に走り、西は平野部へ向かって急俊な尾根が幾筋も派生し、東は、南東方面に位置する宝池から流れ出す権現川によって侵食された深い谷が形成されている。北は生駒山地の北端で、急激に高度を下げ、交野台地に向かって細く突き出している。一方、南は緩やかに一旦高度を下げた後、生駒山地の主峰である生駒山(標高642m)に続いている。

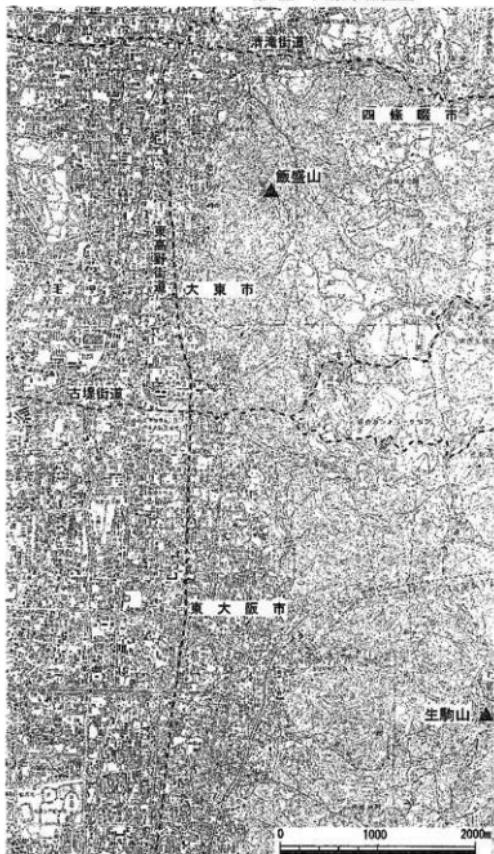
西側に張り出した尾根は幾筋もの谷を形成し、そこから流れ出す中小河川により、裾野には小規模な扇状地が形成されている。

第2節 歴史的環境

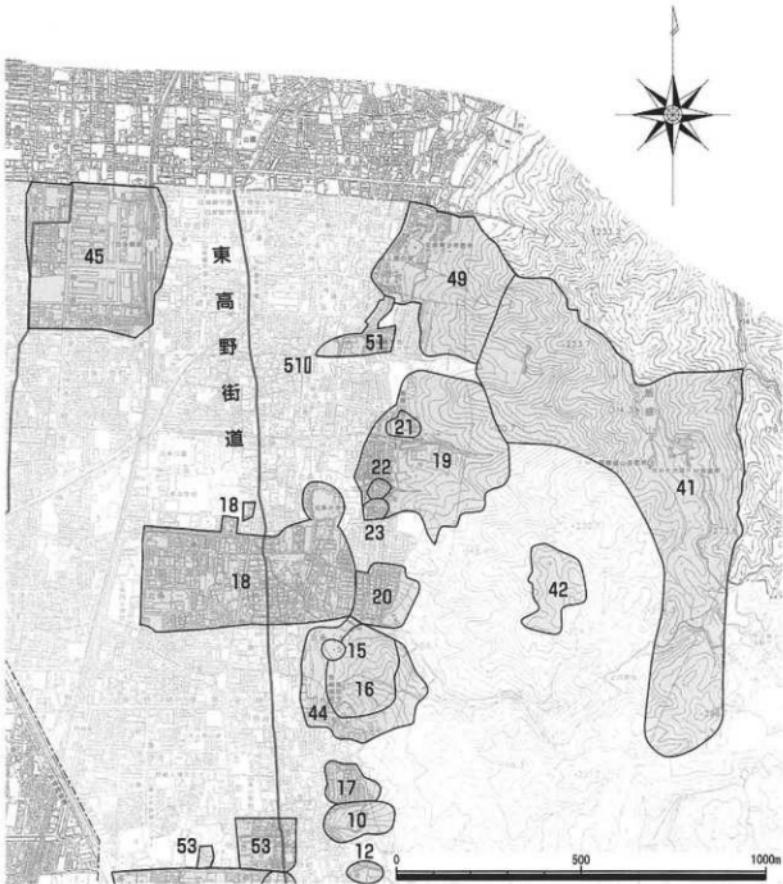
山裾を南北に走る東高野街道沿いの北条、野崎、寺川、中垣内には、多くの遺跡が分布し、扇状地には古代から中世の集落が営まれ、また尾



第1図 大東市位置図



第2図 飯盛山位置図



- | | | | | |
|---------|---------|--------------------|----------|----------|
| 10福連寺遺跡 | 17福連寺古墳 | 21北条古墳 | 42北条東古墳群 | 51城ヶ谷遺跡 |
| 12峯塙内遺跡 | 18北条西遺跡 | 22北条南古墳 | 44野崎城跡 | 53野崎条里遺跡 |
| 15ヤタ山古墳 | 19宮谷古墳群 | 23北条遺跡 | 45北新町遺跡 | |
| 16野崎遺跡 | 20大將軍古墳 | 41飯盛城跡
(飯盛山城遺跡) | 49墓谷古墳群 | |

第3図 周辺の遺跡分布図

根の先端付近には、古墳が築造されている。(第3図)

南の龍間は、標高200～350mの山間部に位置し、現在、大阪と奈良を結ぶ幹線道である阪奈道路が通り、道路沿いの一部は開発が行われているものの、谷あいに存在する集落と耕作地以外は山林となっている地域である。

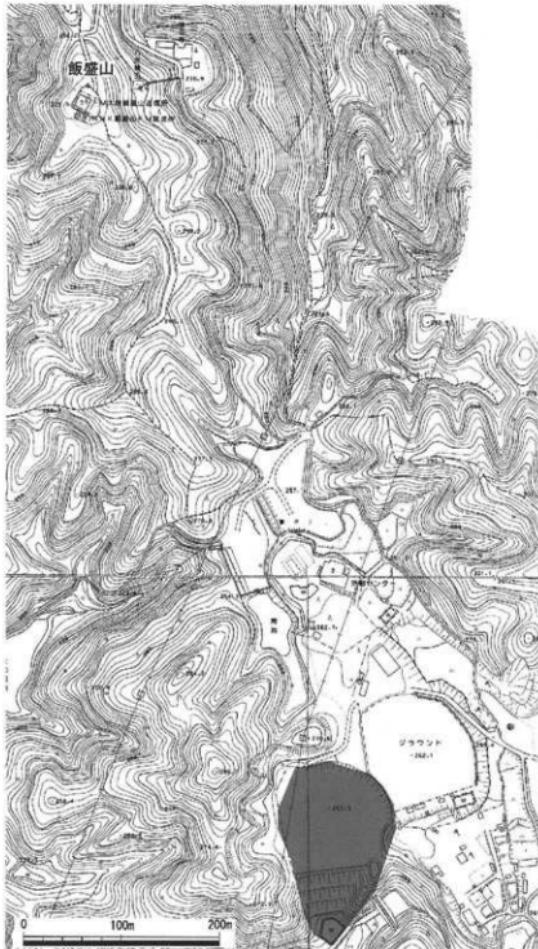
ここには、弥生時代中期の遺跡が分布しており、弥生土器の他に、サヌカイト製石小刀、磨製石剣等の石器が採集されている^(註2)。古墳時代以降中世前半までの様相は明らかではないが、当地の龍光寺には、「延徳二庚戌三月」(1490)の銘が刻まれている延命地蔵^(註3)があり、遅くとも中世後半頃までは、集落が形成されていたと考えられている。また、当地域では花崗岩が産出されることから、徳川人坂城再築の際、石垣に使用する石の採石が行われていたことを示す、刻印石、矢穴石^(註4)が分布している。

第2章

IMO I の調査

第1節 調査に至る経緯

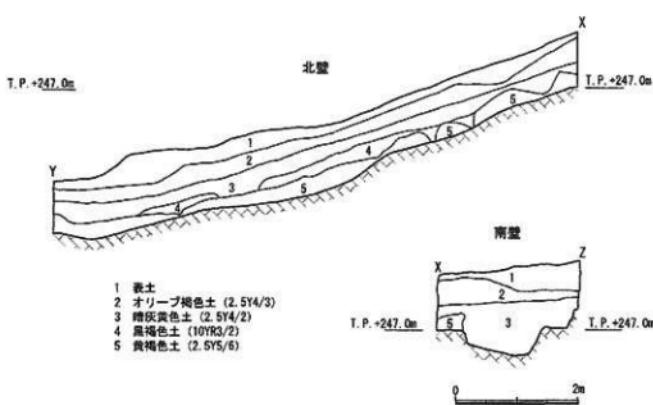
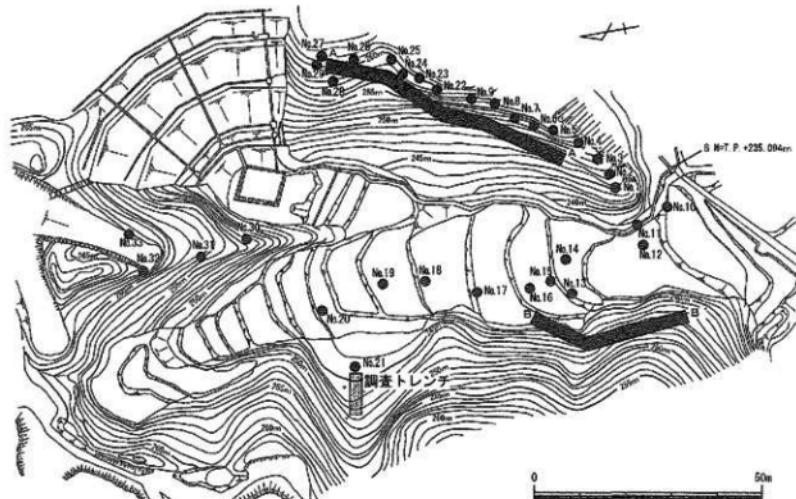
大東市大字龍間1842-2外17筆において、野球グラウンド造成工事を行う計画が土地所有者である学校法人大阪産業大学より出された。(第4図)工事面積は14,933.70 m²で、その内容は一部切土を行い、南に開口する谷の大部分を埋め、コンクリート重力式擁壁やフトン籠堰堤、調整池を築造する大規模なものであった。工事範囲の一部は、周知の埋蔵文化財包蔵地の飯盛山城遺跡に南接するため、事前の試掘調査を実施することになった。昭和63年9月8日付で試掘依頼書が提出され、それに基づき、大東市

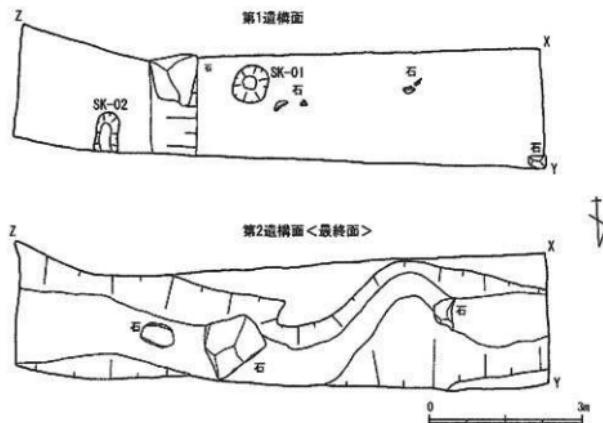


第4図 IMO I 調査地位置図

教育委員会で試掘調査を実施した。

試掘調査は、昭和63年9月16・17日に実施し、1×1m、2×4mのトレンチを合計33箇所、さらに詳細な確認が必要な箇所については、各トレンチを繋ぐ形で実施した。試掘調査の結果、トレンチNo.21において、瓦質土器や土師器等の破片が出土し、造構が残存している可能性が高いため、事業主と協議を行い、発掘調査を実施することとなった。調査は、トレンチNo.21を設定した東方向に開口する谷部分に、3×10mのトレンチを設定して、昭和63年9月26日～同年10月3日まで実施した。(第5図)





第7図 IMO I 調査トレーニング平面図

第2節 調査成果

調査地は、東に向かって開口する狭い谷部分で、調査前の標高は、西側がT.P.+約248m、東側がT.P.+約245mを測り、西から東へ傾斜する斜面地であった。

層序（第6図）

1層は表土である。暗灰～黄灰色を呈する腐葉土で、層厚は20～30cmを測る。2層はオリーブ褐色土で、層厚は約20cm、この層を除去すると、次の3層である暗灰黄色土の上面が、焼土坑や土坑を検出した第1造構面である。3層は層厚20～30cmを測る。4層の黒褐色土は、部分的な堆積状況で、5層の黄褐色土を除去すると、第2造構面（最終面）のベース層となった地山の土である。花崗岩の培養土で、硬く縮まっており、地表からは約1m程度の深さで検出している。

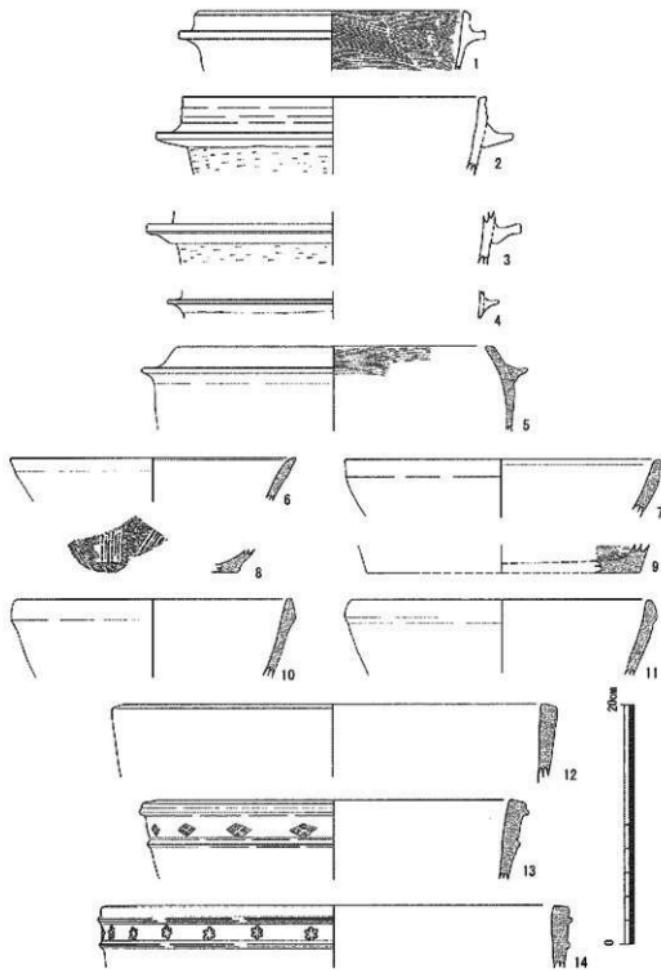
遺構（第7図）

遺構は第1造構面で検出された、SK-01・02の土坑2基のみである。

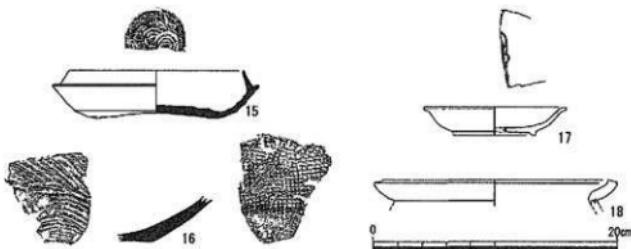
SK-01は、第1造構面の検出過程で焼土層の広がりが認められ、最終的には 0.55×0.65 mの楕円形の焼土坑となった。深さは約5cmと浅く、焚火程度の痕跡であった。

不定形の土坑SK-02は 0.38×0.78 m、深さ20cmを測る。また、第1造構面では50～60cm大の花崗岩の石を検出しているが、自然石で、転石と考えられる。

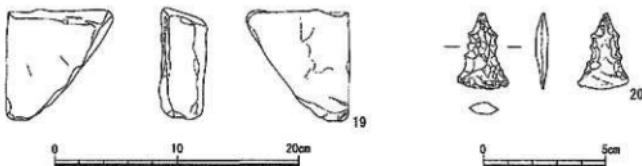
第2造構面は、地山をベースとして検出した最終面で、幅0.2m、深さ0.4mの流路的な地形を検出している。谷地形に伴う、自然流路的なもので、ここでも内部で花崗岩の石を検出しているが、転石と考えられる。



第8図 IMO I 出土遺物実測図(1)



第9図 IMO I 出土遺物実測図(2)



第10図 IMO I 出土遺物実測図(3)

遺物 (第8~10図 写真6・7)

造構からの出土は無く、2~4層からの出土遺物である。2層から土師器羽釜(1・3・4)、瓦質擂鉢(6)、瓦質鉢(9~11)、砥石(19)が、3層から瓦質羽釜(5・18)、瓦質鉢(12~14)、須恵器鉢(16)が、4層から土師器羽釜(2)と、中世の遺物がそれぞれ出土している。また、最下層の5層からは中世の遺物である灰釉陶器皿(17)の他、古墳時代の須恵器杯身(15)サヌカイト製の石鏃(20)が出土している。

また、試掘時にも瓦質擂鉢(7)や瓦質擂鉢(8)が出上している。

第3節 小結

調査の結果、造構面を2面検出しているが、最終面とした第2造構面に関しては、谷部分の自然地形を検出したものである。また、第1造構面に関しても、上坑を2基検出しているものの、造構からの出土遺物が無かったため、造構の性格を含め、詳細は不明である。ただ、出土遺物に関しては、試掘調査時の状況から、古くても中世までの範囲で納まるものと考えていたが、石鏃や古墳時代の須恵器が出土したのは予想外であった。調査地は現在の集落からも離れた山中にあり、通常の生活を営む地ではないことを推察するのは容易であり、調査地の場所を考慮すると、出土遺物量は少ないと言えない。

当地とその周囲で、古くから何らかの人の活動があったことは事実で、これらの遺物は、通常の生活で遺されたものではなく、特別な性格を持った活動によるものと考えられるが、現段階では推測の域を出ない。

第3章 IMO IIの調査

第1節 調査に至る経緯

昭和63年10月、大東市大字北条2377-16において、株式会社FM802の送信所建設の計画が上がった。同社は翌年（平成元年）6月1日の放送開始に向けて、送信所を飯盛山に建設予定であるとのことであった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地の飯盛山城遺跡にあたるため、文化財保護法による届出の提出を求め、事前に埋蔵文化財の協議を行った。送信所建設予定地は、既設の送信所（NHK FM・FM大阪）の南西に隣接した場所（第11図）で、当該地は通称「千疊敷郭」^{註5)}と呼ばれている飯盛城中では最大の規模を持つ曲輪である。既存の送信所建設時は、発掘調査等は実施されていないが、城郭に関する造構が残されていることが予想され、大東市教育委員会では当該工事の内容から、造構に影響を及ぼす可能性があると判断し、工

事に先立つ確認調査を昭和63年12月23日に実施した。調査の結果、瓦質土器や土師器片が出土し、焼土や炭化層等が確認されたことから、発掘調査を実施することとなった。

調査は送信所建設予定地に6×12mの調査トレンチを設定して、平成元年1月9日～同年1月24日まで実施した。

第2節 調査成果

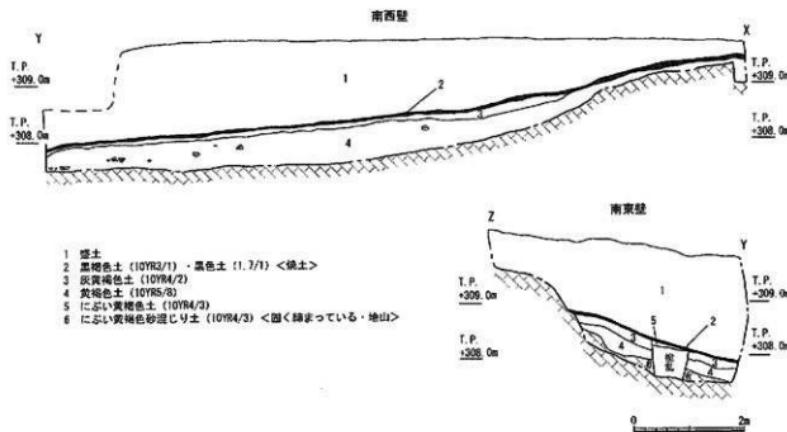
調査地は、既設のFM送信所の南西側の平坦地で、調査前の標高はT.P.+310m前後を測った。

層序（第12図）

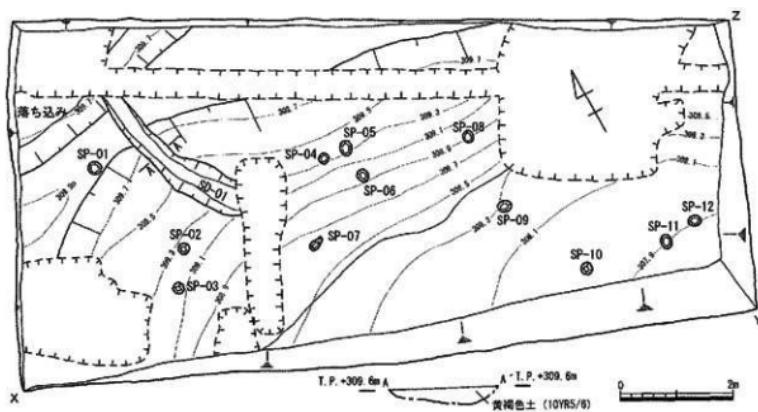
1層は盛土である。既設のFM送信所建設時の整地に伴い、削平された土が南西側に押され堆積したものと考えられる。2層は炭化した植物が含まれている焼土で、約5cmの層厚で調査区全体に堆積していた。検出状況から、山焼きが行われたような様相を呈している。盛土される前の地表面であり、検出面の標高は、北西隅でT.P.+約309.5m、南東隅でT.P.+307.8mを測り、北西から南東方向に傾斜している。3層は灰黄褐色土で、2層の直下に約5cmの層厚で堆積する。4層は第1造構面のベース層となっている黄褐色土で、調査区の南東部に集中して、10～15cmの大礫が含まれていた。4層を掘り下げていくと、凡そ30～50cmで地山に到達する。地山は花崗岩の培養土で、硬く締まった層である。



第11図 IMO II調査地位置図



第12図 IMO II 調査区土層断面図



第13図 IMO II 第1造様面平面図

遺構（第13図）

調査では遺構面を2面検出したが、同一遺構面として考えている。遺構は、北西から南東方向へ傾斜する斜面地においてピット（SP-01～12）、溝（SD-01）が、調査区北西隅で落ち込みが検出された。

ピットは径20～30cm程度で、平面形、規模ともほぼ揃っているが、深さは10cmと浅いものや、40cmを測る深いものもあった。埋土は何れも上層の3層と同じ灰黄褐色土であった。

溝SD-01は、斜面と同じ北西から南東方向に検出している。両端とも搅乱により切られているが、南東方向は搅乱を越えて検出されていないので、この付近で終わっているものと考えられる。北西端は、調査区の北西隅で検出された落ち込みの地山が立ち上がり、最も高くなる付近から始まっている。深さは約12cmで、埋土は黄褐色土であった。

落ち込みは北西に向かって地山が急激に下がっており、深さは約80cmまで確認している。調査区隅での検出であったこと、大半が搅乱により切られていたが、この搅乱は既設の送信所への電力供給ケーブルが埋設されていたため、掘削深度が制限され、完掘できていない。したがって、本来の深さは確認できていない。

遺物（写真7・8）

遺構からの出土遺物は無く、土師器片、瓦質土器片、陶器片等が出土しており、何れも小片である。図化はしていないが、土師器は皿、包括類、瓦質土器は鉢、火鉢の類と見られ、15～16世紀のものと推定される。

第3節 小結

調査を実施したのは、「千畳敷」と呼んでいる城中で最も広い曲輪とされているところである。調査面積が狭小なため、検出された遺構の性格は不明である。詳細は明らかにし得ないが、調査区北東隅で検出した落ち込みは、城郭関連のものとすれば、掘切の可能性も推定される。

第4章まとめ

I MO Iの調査では、遺構は希薄ではあったが、出土遺物は幅広い時代のものが出土している。特に、須恵器杯身は、近くに古墳の存在を想定されるものである。これまでの周辺の状況や、採集遺物を見ると、当地から南へ約1kmの地点で、平安時代の藏骨器と推定される須恵器壺、灰釉陶器壺が採集された太鼓山遺跡^{注10}があり、今回の調査地のような生活域から離れた山中に、当時の墓域等の存在が推定される。中世の遺物に関しては、飯盛城期と同時期のものである。城域外ではあるが、比較的攻めやすいとされる、南の防御を固めるための、臨時的な施設等の存在も推定される。

I MO IIの調査は、飯盛城中最大の曲輪での、しかも城域内では初めて実施した調査であったが、調査面積が狭小であったため、検出した遺構の性格を述べるのは、現段階では困難である。しかし、調査区北西隅で検出した落ち込みは、北西に向って急激に落ち込んでおり、周囲の地形から判断すると、不自然な形状であることから、人工的に地山を削った掘切の可能性もある。

城域内では、この調査の後今日に至るまで調査は行われておらず、遺構の性格を明らかにするために、周囲での調査を実施し、その成果を以て検証する必要があると考える。

註

- (1) 平成27年に名称変更。
- (2) 有生土器は圓見高地性遺跡、石小刀は船岡遺跡、磨製石劍は龍門ハンサカ遺跡で出土している。
- (3) 大東市指定文化財第3号「石造地蔵菩薩立像」
- (4) 「輪廻り」、「足立」等の刻印石が出土している。また、「分洞」の刻印も分布している。
- (5) 大東市埋蔵文化財調査報告第32集『石切構築発掘調査報告書—徳川大阪城再築工事跡の石切構築調査—』2012 大東市教育委員会
- (6) 調査地があった。南へ開口する谷を下った地点に位置している。

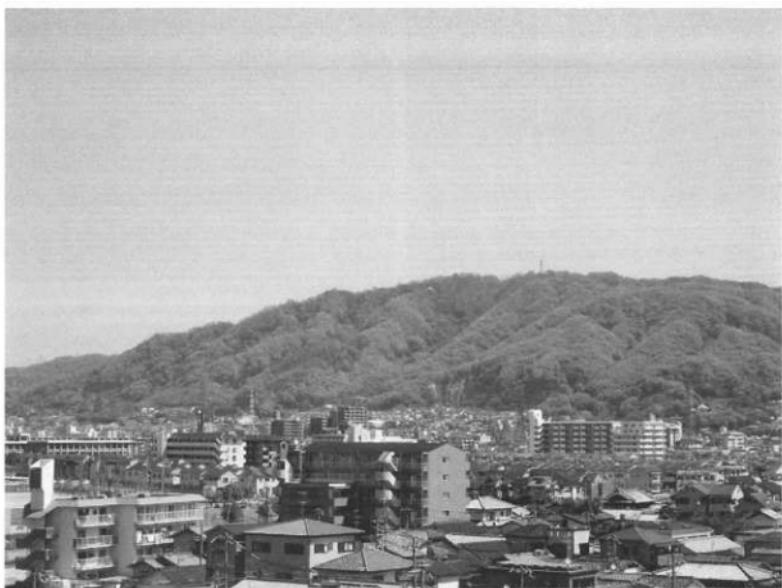
IMO遺構一覧表

番号	調査地	検出規模(m)	深さ(m)	形状・方向	柱痕跡	埋 上	主な出土遺物・時期	備 考
SK-01	IMO I	0.55×0.65	0.05	楕円	—	オリーブ褐色土(2.5Y4/3) 焼土・炭混じり	—	焼土坑
SK-02	IMO I	0.38×0.78	0.2	N→S	—	オリーブ褐色土(2.5Y4/3)	—	北側側溝に切られる
SD-01	IMO II	0.35×2.95	0.12	円弧	—	黄褐色土(10YR5/6)	—	両端を搅乱に切られる
SP-01	IMO II	0.25	0.15	円	—	灰黄褐色土(10YR4/2)	—	第2遺構面(最終面)
SP-02	IMO II	0.22	0.15	円	—	灰黄褐色土(10YR4/2)	—	
SP-03	IMO II	0.2	0.35	円	—	灰黄褐色土(10YR4/2)	—	
SP-04	IMO II	0.19	0.39	円	—	灰黄褐色土(10YR4/2)	—	
SP-05	IMO II	0.23×0.31	0.53	長円	—	灰黄褐色土(10YR4/2)	—	
SP-06	IMO II	0.2×0.25	0.44	楕円	—	灰黄褐色土(10YR4/2)	—	
SP-07	IMO II	0.17×0.27	0.34	不定形	—	灰黄褐色土(10YR4/2)	—	
SP-08	IMO II	0.17×0.19	0.33	楕円	—	灰黄褐色土(10YR4/2)	—	
SP-09	IMO II	0.22×0.25	0.28	楕円	—	灰黄褐色土(10YR4/2)	—	
SP-10	IMO II	0.19	0.23	円	—	灰黄褐色土(10YR4/2)	—	
SP-11	IMO II	0.2×0.26	0.22	楕円	—	灰黄褐色土(10YR4/2)	—	
SP-12	IMO II	0.21×0.24	0.29	楕円	—	灰黄褐色土(10YR4/2)	—	
落ち込み	IMO II	(2.1)×(3.8)	0.8	W→E	—	黄褐色土(10YR5/8)	—	測量区北側で検出 搅乱に切られる

IMO I 遺物観察表

番号	遺跡・部位	器名	法量(cm)	種類	器種	特徴	色調	筋七・筋成	備考
1	2層	オリーブ褐色土	口径:(6.3) 高さ:(4.9)	土師器	羽釜	・輪郭の鋒 ・外縁部は表面に立ち上がる ・内縁部は外側する平底部を持つ ・外面はコロナデ、内面はナマハケ	外・内・底:灰褐色 (2.5YR 7/2)	粗 やや軟	横型?
2	4層	黄褐色土	口径:(28.2) 高さ:(6.5)	土師器	羽釜	・口縁部は外傾気味に立ち上がる、底盤は内傾する形を 持つ ・外縁部は表面に立ち上がる ・下部は接着している ・内縁部は底盤部 ・内面は板状上昇によるナデ	外・内・底:灰褐色 (2.5YR 6/3)	粗 やや軟	
3	2層	オリーブ褐色土	口径:(-) 高さ:(4.8)	土師器	羽釜	・口縁部、底盤ともくぼむ ・やや上方に立ち上がる時で、底盤に明瞭な面を持つ	外・内・底:褐色(SVh6/0)	やや粗 やや硬	
4	2層	オリーブ褐色土	口径:(2.3)	土師器	羽釜	・器種分のみ複数 ・口縁部は底盤に接する ・やや上方に立ち上がる時で、底盤に明瞭な面を持つ ・外縁部はコロナデ	にぶい黄褐色(YVh5/4)	やや粗 やや软	
5	3層	暗灰黄色土	口径:(28.0) 高さ:(6.5)	瓦質土器	羽釜	・体の中央を斜めに立てる様形に、輪郭の着目な対を持つ ・内縁部は平面部を持つ ・外縁部は斜めに立てる ・内面はコロナデ、体の外側に板状工具によるナデ	外:灰白色(PVh6/1) 内:灰褐色(3YR 7/2) 底:灰白色(5YR 6/2)	やや粗 やや软	三足
6	2層	オリーブ褐色土	口径:(24.0) 高さ:(5.5)	瓦質土器	盆钵	・口縁部は直線的に立ち上がり、端面は先り気味に終わる ・外縁部は内側気味に立ち上がる時、端面は先り気味に終わる ・内縁部は斜めに立てる ・内面はコロナデ	外:灰褐色(3YR 6/1) 内:灰白色(2.5YR 8/1) 底:浅黄色(SVh8/3)	やや粗 やや软	
7	試掘	-	口径:(26.0) 高さ:(5.9)	瓦質土器	盆钵	・やや内傾気味に立ち上がる時、端面は先り気味に終わる ・内縁部は斜めに立てる ・内面はコロナデ	外・内:灰(5YV 1/1) 底:灰白色(5YR 6/2)	やや粗 やや软	
8	試掘	-	口径:(19.0) 高さ:(1.9)	瓦質土器	拙瓶	・瓶身はタッカヘ、内側に1条/1.7cmの縦 ・底部はタッカヘ、外側は斜面不規則	外:灰オリーブ色(YVh6/2) 内:灰白色(5YR 7/2)	やや粗 やや软	
9	2層	オリーブ褐色土	口径:(22.5) 高さ:(2.3)	瓦質土器	鉢	・口縁部は内側気味に立ち上がる時、端面は先り気味に終わる ・内縫部は斜めに立てる ・内面はコロナデ	外・内:灰褐色 (2.5YR 8/1)	やや粗 やや软	
10	2層	オリーブ褐色土	口径:(22.3) 高さ:(7.7)	瓦質土器	鉢	・口縁部は内側気味に立ち上がる時、端面は先り気味に終わる ・内縫部は斜めに立てる ・内面は斜めに立てる ・内縁部底盤部は近づけている ・内面は底盤のため剥離が大きい	外:灰褐色(2.5YR 6/1) 内:灰白色(2.5YR 8/2)	やや粗 软	
11	2層	オリーブ褐色土	口径:(24.6) 高さ:(5.9)	瓦質土器	鉢	・口縁部は内側気味に立ち上がる時、端面は先り気味に終わる ・内縫部は斜めに立てる ・内面は斜めに立てる ・内縁部底盤部は近づけている ・内面は底盤のため剥離が大きい	外:淡黄色(2.5YR 3/1) 内:灰白色(2.5YR 8/2)	やや粗 软	
12	3層	暗灰黄色土	口径:(34.4) 高さ:(6.0)	瓦質土器	鉢	・輪郭部は外傾する低い平底部を持つ ・内外縫ともに底盤が剥離し、表面の剥離が大きい ・内縁部底盤部はコロナデ	外:灰白色(2.5YR 7/1) 内:灰褐色(2.5YR 7/2) 底:にぶい黄褐色 (10YR 7/2)	粗 やや软	火鉢
13	3層	暗灰黄色土	口径:(31.7) 高さ:(6.6)	瓦質土器	鉢	・口縁部は外傾する低い平底部を持つ ・底盤外縫には多量の炭化、その間に発達(図版文)の火 ダントン ・外縫、内縫ともに底盤が剥離し、表面の剥離が大きい	外:灰褐色(5YR 5/1) 内:灰褐色(7.5YR 4/1) 底:灰白色(2.5YR 8/1)	粗 软	奈良火鉢
14	3層	暗灰黄色土	口径:(37.8) 高さ:(5.8)	瓦質土器	鉢	・口縁部は内側気味に立ち上がる時、その間に花形(菊花文)の火 ダントン ・内縫部はコロナデ、内面は板状工具によるナデ	外:灰白色(5YR 5/2) 内:灰褐色(7.5YR 6/1) 底:灰白色(2.5YR 8/1)	粗 软	奈良火鉢
15	5層	黄褐色土	口径:(14.0) 高さ:(3.9)	須恵器	杯舟	・短脚するたぐひで、端面は丸く終わる ・内縫部は底盤部約1/3の凹窓(ラケズ) ・内縫部はコロナデ ・内縫部底盤部に凹窓タキとナデを施す	外・内・底:灰褐色(5YR 6/1)	粗 粗	II~4~5 GC中~後
16	3層	暗灰黄色土	口径:(-) 高さ:(3.7)	須恵器	鉢?	・内縫部は底盤部に部分的にナデ ・内縫部はコロナデ	外:灰褐色(5YR 6/1) 内・底:灰褐色(5YR 6/6)	粗 粗	西部片
17	5層	黄褐色土	口径:(11.8) 高さ:(2.3) 底径:(6.7)	灰陶器	皿	・(火)の字形に広く底盤から、口縁部は外傾して終わる ・底盤内面にチヂの跡	外・内:灰オリーブ色 (7.5YR 5/2) 底:灰褐色(7.5YR 7/1)	粗 粗	
18	3層	暗灰黄色土	口径:(18.8) 高さ:(2.0)	土師器	羽釜	・(火)の字形に広く底盤から、口縁部は外傾して終わる ・内縫部は斜めに立てる ・内縫部底盤部はコロナデ ・内縫部は底盤部に凹窓タキとナデを施す	外・内:にぶい黄褐色 (10YR 6/4) 底:黑色(7.5YR 2/1)	粗 粗	大和型
19	2層	オリーブ褐色土	長:9.0 幅:8.6 厚:3.9 底:387.5g	石製品	砥石?	・表面は磨きタキに部分的にナデ ・内縫部はコロナデ	灰白色(YVh8/1)	-	基底岩盤
20	5層	黄褐色土	長:8.2 幅:2.1 厚:0.5 重:3g	石器	石盤	・平底式 ・先端部を尖く	灰褐色(N4/1)	-	ナスカイト型

写真1 飯盛山写真



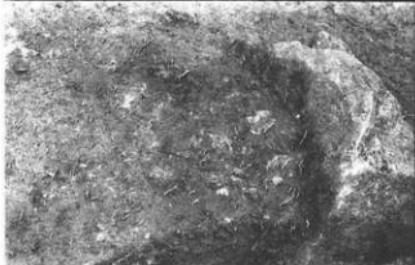
飯盛山遠景（市役所庁舎屋上から）



飯盛山周辺航空写真



調査地全景（北より）



焼土検出状況（西より）



調査トレンチ付近露岩



第1遺構面SK-01<焼土坑>（西より）



第1遺構面（東より）



須恵器杯身出土状況（北西より）



西壁土層断面（東より）



石器出土状況（東より）



南壁土層断面（北より）



第2造構面<最終面>（東より）



調査状況（北西より）



第1造構面（南東より）



盛土除去後焼土層検出状況（北西より）



第1造構面SD-01（南より）



第1造構面（北西より）



第2遺構面<最終面>（南東より）



南西壁土層断面（北東より）



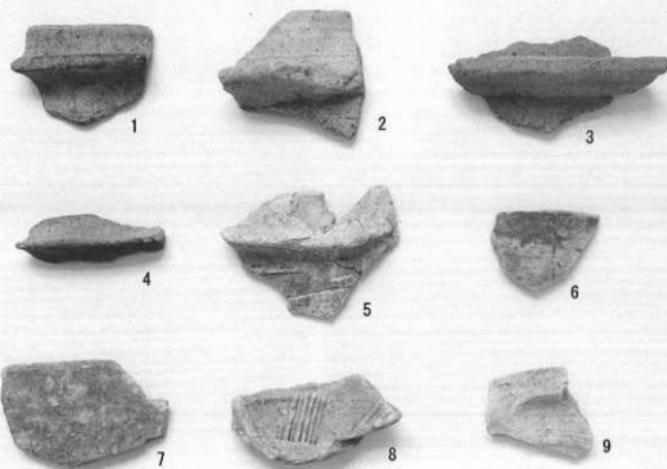
第2遺構面<最終面>落ち込み（東より）



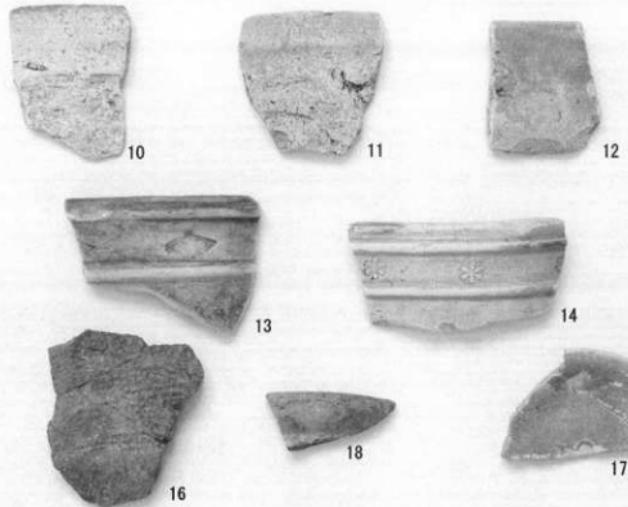
南東壁土層断面（北西より）



第2遺構面<最終面>（北西より）



IMO I (1~4土師器羽釜、5瓦質羽釜、6・8瓦質擂鉢、7瓦質捏鉢、9瓦質鉢)

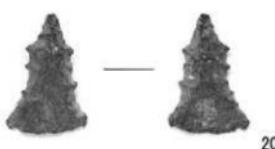


IMO I (10~12瓦質鉢、13・14瓦質火鉢、16須恵器鉢・17灰釉陶器皿、18土師器羽釜)

写真7 IMO出土遺物(2)



IMO I (15須恵器杯身)



IMO I (20石礫)



19

IMO I
(19砥石)

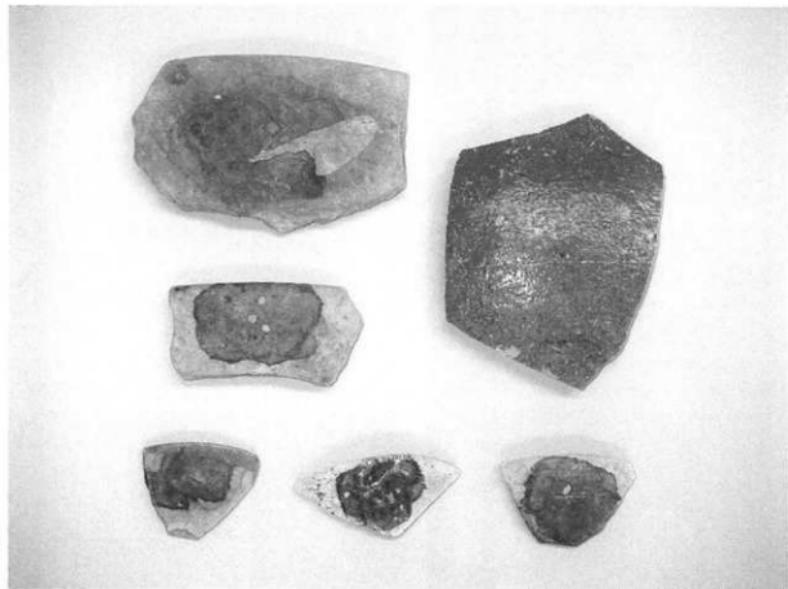
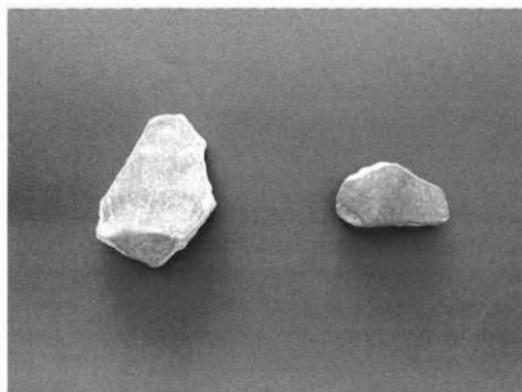
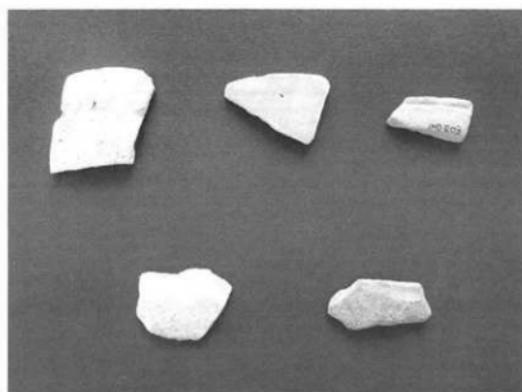


写真 8 IMO 出土遺物 (3)



IMO II (瓦質土器片)



IMO II (土師器片)



IMO II (土師器片)

報告書抄録

ふりがな	いいもりやまじろいせきはつくつちょうさがいほう							
書名	飯盛山城造跡発掘調査概報							
副書名	グランド造成・FM送信所建設に伴う							
巻次								
シリーズ名	大東市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第40集							
編集者名	黒田 淳							
編集機関	大東市教育委員会							
所在地	〒574-0076 大阪府大東市曙町4-6 TEL072-870-9105							
発行年月日	2016年(平成28年)3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
いいもりやまじろいせき 飯盛山城遺跡 (IMO I)	おおさかふ 大阪府 だいとうし 大東市 おおむちやまとつま 大字龍門 1842-2 外17筆	27218	41	34° 43' 7"	135° 39' 24"	1988年 9月26日～ 10月3日	30 m ²	グラウンド造成
いいもりやまじろいせき 飯盛山城遺跡 (IMO II)	おおさかふ 大阪府 だいとうし 大東市 おおむちやまとつま 大字北条 2377-16	27218	41	34° 43' 30"	135° 39' 14"	1989年 1月9日～ 1月29日	72 m ²	FM送信 所建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
飯盛山城遺跡 (IMO I)		弥生時代 古墳時代 鎌倉時代 戦国時代		土坑・焼土坑		石鐵・砥石・須恵器・土師器・瓦質土器・灰軸陶器		
飯盛山城遺跡 (IMO II)	山城跡	戦国時代		溝、ピット、落ち込み		土師器・瓦質土器・陶器	城郭(曲輪)部分を調査	

大東市埋蔵文化財調査報告第 40 集

飯盛山城遺跡発掘調査概報

— グラウンド造成・FM送信所建設に伴う —

2016 年 3 月 31 日発行

編集・発行 大東市教育委員会

〒576-0076 大阪府大東市瑞町 4-6

印刷・製本 株式会社 口興商会

〒577-0005 東大阪市七軒家 7 番 27 号

印刷物番号

27-92